

愛について

茨城県立中央看護大学 一般科目「哲学」

筑波大学大学院 梁 安吉子

‘愛は決して滅びない。
…信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。
その中で最も大いなるものは、愛である。’

— 聖書「第1コリントの信徒への手紙」 13章8,13節より

「愛」として表現されるもの①

love(n.)*

Middle English *love*, from Old English *lufu* "feeling of love; romantic sexual attraction; affection; friendliness; the love of God; Love as an abstraction or personification." This is reconstructed to be from Proto-Germanic **lubo*, from PIE root **leubh-* "to care, desire, love."

下線部対訳：ゲルマン祖語**lubo*から再構成されている。（中略）ゲルマン語派の単語は印欧祖語の語根**leubh-*「心配する、望む、愛する」に由来。

*Online Etymology Dictionary. 「love」 . <https://www.etymonline.com/search?q=love>, (参照2026-04-15)

(余談) 「愛する = 信じる」 ?

believe(v.)*

Middle English *bileven*, from Old English *belyfan* "to have faith or confidence" (in a person), earlier *geleafa* (Mercian), *gelefa* (Northumbrian), *gelyfan* (West Saxon), from Proto-Germanic **ga-laubjan* "to believe," perhaps literally "hold dear (or valuable, or satisfactory), to love" (source also of Old Saxon *gilobian* "believe," Dutch *geloven*, Old High German *gilouben*, German *glauben*), ultimately a compound based on PIE root ***leubh-** "to care, desire, love"

下線部対訳：根源的には印欧祖語の語根***leubh-**「心配する、望む、愛する」に基づく複合形。

→強意の接頭辞ga-がのちにbe-に変化した可能性

→強く信じること = 愛すること？

*Online Etymology Dictionary. 「believe」 . <https://www.etymonline.com/search?q=believe>, (参照2026-04-15)

「愛」として表現されるもの②

C. S. ルイス*による「四つの愛」のカテゴリー

- ①storge：場所や経験など特定の条件に基づく親しみ
- ②philia：共通の目的に基づく絆、友情、仲間意識
- ③eros：自らを顧みず対象を欲求する熱情的愛
- ④agape：キリスト教における神から人間への無条件な愛

*C. S. Lewis, 1898-1963；イギリスの文学者および神学者。『ナルニア国物語』で知られる。

古代ギリシャ哲学における「愛」

『饗宴』における愛をめぐる対話が有名

BC380年アテネの哲学者プラトンによって執筆された「エロース eros」についての哲学書。

ここで言われているエロスとは、ギリシャ神話『神統紀』のいわゆるキューピッド、つまり恋愛の神に由来する。

そこから転じて、美しいものを思慕する心そのものを指している。



『饗宴』における「愛」

賢い婦人ディオティマとソクラテスが対話する形式で彼独特の「産婆術」について語られる。

皆：「愛とは？」

アリストパネス：「愛とは自分の片割れを探し、合一することで本当の自分に戻ることだ！」

アガトン：「愛とは自分に欠落しているもの（美しさや善）を手に入れて所有することだ！」

ソクラテス：「違う！愛とは出産のことだ！」

- ここでの出産とは、「永遠化」のこと

= 自分の持つ知識や善、美を後世に引き継ぐことで永遠にしようとする

= 素晴らしい文学作品、正義の法律など、真善美に関して人間が生み出す良いものを永遠に後世に残そうとすること、愛とは真善美をただ求めるだけでなくそれを永遠なものにしようとする努力すること。

→ 真理への愛：eros



ラファエロ『アテネの学堂』

(中央赤い服がプラトン、隣の青い服がアリストテレス、左から二人目がソクラテス)

西洋哲学における「愛」

agape(n.)

from Greek *agapē* "brotherly love, charity," in Ecclesiastical use "the love of God for man and man for God," a late and mostly Christian formation from the verb *agapan* "greet with affection, receive with friendship; to like, love," which is of unknown origin. It sometimes is explained as **aga-pa-* "to protect greatly," with intensifying prefix *aga-*. "The Christian use may have been influenced by Hebr. 'ahaba 'love'".

→ 正確な語源は不明。ヘブライ語が原典である聖書がギリシャ語に翻訳されたことによって一般化した言葉。

→ 真理からの愛：agape

シラバス

- 1回：イントロダクション（今日）
- 2回目：アウグスティヌス「愛したいのに愛せないことについて」
- 3回目：トマス・アキナス「楽観ではない希望について」
- 4回目：パスカル「愛によって他者を正確に知ることにについて」
- 5回目：予備日
- 6回目：ドストエフスキー「愛には怖れが無いことについて」
- 7回目：イエス・キリスト「無条件の永遠の愛について」